
クリエイトオンライン

ふーみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリエイトオンライン

【Nコード】

N11115P

【作者名】

ふーみん

【あらすじ】

クリエイトオンライン。それは大型アップデートとバージョンアップを繰り返した大人気オンラインゲームで、世界中にいるユーザーは一億人を越える。

そして世界中にいるユーザーが待ちに待った第四回目のバージョンアップで一億人の人は消えてしまう。それは地球にいる人は誰も知らない。誰も覚えてない。忘れられ、それでも生き抜く一億人の内の、誰かの物語が始まる。

序章 第一話 ボタンを押せますか

史上最大のオンラインゲーム、クリエイトオンライン。

内容は最初は2Dゲームだったのに人気が出て、アップデートとバージョンアップを繰り返す度に最新技術を盛り込み気付けばデスクトップを見るかわりにヘッドギア型の脳に直接映像を視認させる疑似モニターに、キーボードとマウスを操作する代わりに脳波により操作するための電極コードに、ゲームをする為の自分が座る椅子や敷居の代わりにクリエイトオンライン専用身体固定用椅子に様変わりしていった。

何故そう変わったか。

最初のバージョンアップで2Dから3DのFPSタイプになって、次で行動反映システムが導入されて、今回の脳波で操作する最近の有名になったシステムを導入して上の機器になった。

これにより身体障害者にも楽しめると言った他に、これをするに脳への負担や異常などは発生しないかなど、危険性を危惧する声もあったが最終的には落ち着いた。

そしてサービス開始当日に事件は起きる。

バージョンアップ終了後、メンテナンスも終わりのサービス開始時間になり世界中にいる一億人のクリエイトオンラインのユーザーが忽然と消えた。それは瞬く間に世間の耳に入ると思いきや、日常に入る報道機関はそれには触れず、誰も探さず、それどころか誰も覚えておらず、忘れられていった。

それは有名人でも、家族でも、恋人でも、友人さえも初めからいなかったかのように忘れていった。

ならば、忘れられていった一億人はどこへ行ったか。

それはその世界の人には分からない。

覚えていないのだから。

ならここに記そう、これから創られる物語を…。

クリエイトオンライン 第1話

私はサービス開始と同時にパソコンの画面のスタートという文字をクリックする。すると頭に身体固定を実行してくださいとアナウンスが流れたので手元のボタンを押して身体を固定する。

もう胸はドキドキで一杯だ。

すると頭に少しの違和感と共に目の前の景色が変わる。うん、いつもの光景だ。

そこはクリエイトオンラインの開始地点、マイルームだ。見た目はホテルの一室といった所だ。

私はとりあえず立とうと手元を動かす。が、立てない。

おかしい、と思ってから気が付く。今回から脳波で体を動かすんだっけ。

試しに立つイメージをする。すると体が勝手に立ち上がる。

これがクリエイトファンドの科学力か！と感動していると目の前にウィンドウが現れた。

「これがキャラクターエディット画面かー」

毎度の事ながらこのゲームは凝っている。そう思いながら私は目の前に浮かぶウィンドウに手を伸ばす。

そこに映るのが初期から愛用しているキャラクターのヒカルだ。見た目は長い黒髪で長身のほっそりした体型の男で、今までどんなダンジョンもこのキャラクターでクリアしてきた。

どんなダンジョンと言っても、未だにクリアしてないダンジョンもある。いわゆる無理ゲー、製作者の陰謀なる超難易度のダンジョンだ。

私も何度か挑戦していたが、最終階層のボスにいつも追い返されてしまう。まあ、それでも最終階層に行けるのが今のところ私だけだったので、その前の階層の素材など持っているのは私だけである。

よくもまあこんなダンジョン出してクレーム出ないとは思うけど、実際に最終階層に行ける人がいるからなんとも言えないが。

あと今話を聞くに私がオンラインゲームにも関わらずソロプレイヤーだということがわかってくれただろうか。

普通古参やベテランプレイヤーはソロプレイの非効率さが解っているのでそんな馬鹿な真似はしないが私はパーティープレイはしない。というか、したいが私は嫉妬や疎外の対象になりやすくてな、マイクを持っているのに最近話したのはバージョンアップ記念イベントのNPCだ。

……………い、いいか！？ 私は決してパーティープレイがしたいのではなく、むしろ仲間がいないとダンジョンがクリア出来ずにいる軟弱なプレイヤーなど、ましてやクリア出来ない理由を並べてどうすればクリア出来るか話し合っているのを見て、なんてうらやま……………じゃなくて楽しそ……………じゃなくて！ 傷の舐め合いなんかをしている連中なんぞこちらから願い下げだ！

……………とは言ってもレベルの低い内はパーティープレイするのがクリエイトオンラインの通過儀礼なんだがな。

このクリエイトオンラインはバージョンアップする度にキャラクターのレベルがリセットされるんだ。これには三者三様の意見が出る。それじゃ今まで頑張ってレベルを上げた意味が無いだろうとか、新参の人とのレベル差が空きすぎてつまらないとか、色々あったがSPと装備品と倉庫のアイテムを引き継ぐ形に落ち着いた。

SPについて説明すると、スキルポイントの略でこれを消費して

様々な特殊能力を獲得する為のものだ。むしろ、こちらがクリエイトオンラインの醍醐味かもしれない。

この獲得する特殊能力はバージョンアップとアップデートを繰り返す事で月日を重ねる後に増えていき、今回のバージョンアップでさらに増えるらしい。

私はそれがどんなものかと胸を膨らませキャラクターエディット画面の決定を押す。

すると私の体が光だし、身長がキャラクターエディット画面で設定したものにならなかった。

…………… ならなかった！？

「な、なんじゃこりゃー！」

思わず某刑事みたく叫んでしまった。

それもそうだ。キャラクターエディット画面にはいつも鏡で見ている私自身の姿。格好はヒカルの装備品と同じだが身長136cm、無い乳切ったことがない馬鹿長い黒髪の美少女！

自分で言うのは頭が悪そうに聞こえるな、我ながら。

… ってそんなことを考えてる場合じゃない！

「おいおい冗談だろ…」

ゲームの中までコンプレックスの塊であるこの体でいなければい

けないのか！？いや、否！断じて否！

私は装備品にある無限ポーチをウィンドウに表示する。脳波で一発で表示出来るのは便利だと思いながら目当ての物を見つける。『ヘンゲージリング』だ。

これは指に装備して使用することで好きな姿に変えることが出来る魔道具だ。

ネーミングセンスは何とも言えないが、例のダンジョンの最終階層で手にはいったもので知名度は低いが効果は確かだったのを覚えている。

ともかくウィンドウにある『ヘンゲージリング』を袋から自分の指に重ねてみるが袋に戻る。

……………あれ？

お、落ち着け！落ち着くんだ私！まだ装備することが出来ないなんて決まってる！

その後無限ポーチにポーチに出すというコマンドと、それを実行するとポーチにアイテムが出現するのと、さらに実際に装備しなければいけないことが解るまで小一時間かった。

「ふ…ふふ……」

指輪を装備することさえ四苦八苦したがついいつものヒカルの姿になれた…！

さようならいつもの私…、こんにちはゲームの私…！

「さあてと、大分頭を使ったせいか疲れたな。休憩するか！」

休憩だ休憩。私には糖分が足りない。

ログアウトするために右手中指を押し込んで、椅子のボタンを押し…って違う違う。ゲームの私がじゃなく現実の方だ。

私は手に力を込め、ってゲームの私じゃないんだってば！

四苦八苦してる私にメッセージ届く。

なんだろう、と思っただが見るのは後だ。とログアウト作業に戻る。

私は気付くべきだった。自身に起きたことを。

私は早く見るべきだった。メッセージ、そして現実を。

その数十分後、チュートリアルクエストを達成しないとログアウト出来ないのかもしれないと結論付けた私は、さっき来たメッセージを確認することにした。

そこには『ようこそ異世界へ』の文字と今の私の状況が書かれていた。

第二話

「な…んだ…と……！」

メッセージを読み終えた私はネタと分かっててもこの台詞を言わずにいらなかった。

クリエイトオンライン 第2話

『ようこそ異世界へ』

これはまだ分かる。何せこのゲーム自体が異世界にいるようにその世界観を楽しむ事が出来るからだ。

だがどうだろう。メッセージには続きがあつてそれが事実なら私は超不親切なチュートリアルであることになる。メッセージはこう書かれていた。

『あなたたちはボタンを押せますか？』

私はこの意図的と思えない文章に衝撃を覚えた。普段なら意

味のわからないメッセージだと削除したかもしれない。だが、考えられる推察でいくと三通りある。

1つ。ボタンというのはこのメッセージウィンドウに表示されている右上にあるバツのボタンだ。これを押したときこのウィンドウを消すということになり、メッセージが読めなくなるという意味になる。

2つ。現実の私が椅子のボタンを押すこと。これは先程も試したが結論としてユートリアルクエストを達成しないと押せない、ログアウト出来ないと踏んでいるので現状では不可能だと思われる。

3つ。これはタイミングを見るに私がログアウトを試みたのがトリガーとなり送られたものなのかもしれない。すると、このボタンの表すのは私の行動による偶発、いわゆる一定の行動をとることによるものの事を指している。となると、私がこれからスキルウィンドウを見たり、移動したり、なにか行動したら『ボタンを押す』ことになる。

この中で一番有り得るのが1だ。視覚的にあるボタンはこれしかない。

3はオンラインゲームにしては少し不親切だし私が勝手に深読みしただけだ。

2は今すぐには不可能だと私は考えてるので、これを考えるにユートリアルクエストをクリア出来ますか、となる訳だ。

よく考えると2が正解なのかもしれないが私は3を選ぶことにした。何故なら私はジョーカーな事が好きだからだ！

という訳でスキルウィンドウを出してみる。

「……………何も起こらないな」

何だ深読みかとあっさり流す。

ともかくログアウトは後回しにしてスキルを確認しようと私はウィンドウを触る。

「ふむ。前回とあまり変わらないな。強いて言うなら格闘系のスキルが増えたくらい…って、ウィンドウが重なってるな。いつの間にか他のウィンドウを出したのだろう」

そう。気付いたら出ていた。

「ふむ、これが新スキル……………だと……………！」

そのウィンドウにはとてもじゃないがオンラインゲームでは到底考えつかないスキルが表示されていた。

『首の動作』

『目の動作』

『口の動作』

『顎の動作』

『舌の動作』

『瞼の動作』

『総合：顔の動作』

「これでは……………これではまるで……………！」

その時またメッセージが私に届く。すぐさま反応した私はメッセージを表示する。それには

『あなたたちはボタンを押せますか？』

と書かれただけであつた。さつと同じじゃないかと思つたがその文章の下に右上を指す矢印が表示されていた。まさかまさかと思ひながらそちらを見ると

「本当にボタンだったのか……」

押せと言う文字とその下に赤いボタンがあつた。

「クククク……策士策に溺れるといったところか……！」

取り敢えずボタンの意味が分かつた所で私はスキルウィンドウに目を戻す。

にしてもこの目とか口とかのスキルは必要なのか？と思ひながら試しに『総合：腕の動作』を1レベル上げることにした。するとBSPを1消費します、と表示され、はいかいいえの選択肢が現れた。BSP？と新たな値に興味湧き、スキルウィンドウをくまなく見るとSPの隣にそれと同じ値のBSPというものがあるのに気付く。

なるほど、これが今回の新スキルという訳だ。まさか新しいカテゴリーのスキルとはな。多分これもレベルアップ毎に手に入るだろう。

私は新スキルを知るべく手当たり次第BSPを消費するスキルを獲得する。

「なるほど、総合のついたもの以外の最大値は0レベルで、それ以上上げたければ総合のついたものを取ると」

そして総合のついたスキルは十分率と同じでその動作の入る部分の上限を上げる訳だ。

例えば『総合：腕の動作』を10レベル取れば『右手の動作』『左手の動作』などのスキルが1レベルまで取得可能になる。

そして気になった事を実行してみる。

「ふむ、総合の上限は1000レベルか。自分のレベルによる制限は無いようだな」

つまり自分がレベル1でも1000レベルまで各動作のレベルが上がると。ならばと、次は各動作を上げるとどういった事になるかだ。

「……………初めからこれをすればよかったのでは」

思わず言葉を漏らす但实际上にそう思う。何故なら各動作のレベルが上がる度にその部位を動かす効率が上がるのを感じ、100を越えた時点で思い通り、つまり普段と同じように動けることに気付いた。……………ついでだし全て1000レベルまで上げておこう。

動作の他にも感覚というのがあり、第一感から第六感まであった。

それも1000レベルまで上げておいた。

そういえば何故私がさくさくスキルレベルをカンスト出来るかと言っと、初期の時代からクリエイトオンラインをやってきたお陰でSPが増えに増え、私のSPは203万です、とギャグでも笑えない数値になっている。なのでBSPも同じ値だったので1000レベルまで上げててもまだ余っているぐらいだ。

次にSPを消費するスキルを取る事にした。

「ふむ、前回と違ってレベル制限が厳しいな」

そうなのだ。色々なスキルを見るが1レベルでは取れるものが少しかなく、ほとんど5レベルから取れるスキルばかりだった。

これではソロプレイヤーがさらに初見死しやすくなったな。

まさに命を大事に、と言ったところか。

取り敢えず体の動きが良くなったので少し体慣らしと準備体操をする。少しのぎこちなさもあらず、この長身のヒカルの体は私にとっては具合はいいみたいだ。

慣らしも済んだしあのボタンを押してみるか。私の予想だとあのボタンを押すには歩く動作、腕を上げる動作、ボタンを押す動作の3つが必要で、まずプレイヤーにBSPを消費するスキルを取得しないと歩くことも腕を上げることもボタンを押すことも出来ないことをあのメッセージは言っているのではないのか、と。

スパルタではあるが確かに説明書がないゲームはプレイヤーが自

分から操作を身に付けないとプレイに支障が出るからな。そんなことを考えながらボタンの目の前に立つ。

多分これがログアウトするための今回のボタンなのかもしれない。動作と感覚のレベルをカスタムさせたせいか現実にある体の感覚が最早無いからな。オプションウィンドウすら今回のクリエイイトオンラインはないから場所を指定する形にしたのかもしれない。

ポチっとな。

押した瞬間視界が暗転し、次に見えたのはパソコンのデスクトップだった。

「なんだ。やはりログアウトのボタンだったか」

さっきから考えていた最悪でないことに安堵しつつ息をつく。このゲームのリアルさは現実とあまりにも似すぎている。

「さてと。ミルクココアとチョコレートケーキだ。私には糖分が足りない」

そう思いながら立ち上がろうとするが、立てない。身体固定されていたのを忘れていたのだ。

確か手元のボタンを押せばいいはずだ、と。

ポチっとな。

瞬間、目の前が眩い光に包まれる。

「な、なんだこれは!？」

身体固定されていない、唯一動かせる頭を使い自分の体を見ると徐々に体が半透明になっていくのが見えた。

このままでは不味いと体を動かすが固定された体は動かせなかった。

体が半透明から透明になっていくと共に意識も薄くなっていく。

そしてこれ以上意識を保てないと思った時、不意にデスクトップを見た私は薄れ行く意識の中で笑いながらこれからどうなるかと考え気を失った。

暗い部屋、何かのコードが床中に散らばっている。そのコードは暗い部屋の中で光を発している所に向かって伸びていた。

その光源はパソコンのデスクトップでその前にある椅子に誰も座っておらず、デスクトップの光が椅子のみを照らしていた。

そしてそのデスクトップの画面に文字が映し出されており、次のように表示されていた。

『ボタンの入力を受け付けました。現実からログアウトしてクリエイトオンラインにログインします。』

第一章 第一節 第一話 森の中にて

目が覚めると自分の部屋でもクリエイトオンラインのマイルームでもない、どこかの森の中だった。

クリエイトオンライン 第3話

気を失う寸前に見たあの文章、あれも様々な意味合いで言っているのではないだろうか。まあ、そんな事よりする事がある。

私は一回ログアウトしたせいであろう効果の切れた『ヘンゲージリング』を再度使用する。

「ふむ、問題ないな」

ステータスウィンドウを表示して自分の容姿を確認する。長い黒髪ほっそりした長身の男で黒い衣を纏っている。腰に回しように黒いポーチを付けていて黒い手袋、黒い靴を身に付けたいつも私の相棒のキャラクター、ヒカルそのものだった。

ついでにと、ベースを確認すると前回のベースの他に増えている

ものは無かった。だが、前回のレベル差はあるお陰か各ベースが落ちているのが分かる。

ここで各ベースについて説明すると、『力』『知恵』『技能』『体力』『瞬発力』『魔力』『幸運』の7つから成り立っていて、ベースの値でステータスの攻撃力や防御力、HP、MPが決まってくといった所だ。さらにベースを上げるにはキャラクターのレベルを上げる必要があるが、レベルを上げた時にBPを獲得出来、それを使用してベースを強化することになる。

まあ、レベルが上がると職業によってベースが直接決まった数値上がるから職業差がよく出るゲームでもあるな。

例えば、戦士系統の職なら攻撃力や防御力、HPに関係のある力と体力が上がる。

魔法使い系統なら魔法攻撃力や魔法防御力、MPに関係のある知恵と魔力が上がる。

盗賊系統なら回避力や命中力、素早さに関係のある技能や瞬発力が上がる。

実際このゲームじゃ特化型は不人気らしく、オールラウンドの勇者系統が人気だ。

ちなみに私は魔剣銃士という初期にしかない職で、ベース全てが上がる代わりにHPが常に1割の状態になるハイリスクハイリタインの職だ。

初期の頃は皆がこの職に決めるがすぐに諦めてしまう。それもそ

うだ。レベルが上がっても増えるHPは下手すれば一桁でレベルが10になる頃には他の人が平均HP2000に対して自身がHP200じゃやりきれない。何せ、ボスの弱攻撃ですら即死するからな。

いわゆる釣り職という事で有名である。次のバージョンアップで選択出来なくなったが職自体は消されたわけでないので私は愛用している。

取り敢えずステータスの確認は終わった事だし、マップを表示する。ふむ？

「表示出来ない…か」

もしやと思い他のウィンドウを表示していく。そして表示出来るものと出来ないものがあるのがわかった。

「マップにチャット、メガホン、メールにフレンドリストとパーティーリストが表示不可か」

ステータスにスキル、アイテムリストにクリエイトリストは表示出来た。

ちなみにクリエイトリストというのは、このゲームのメインみたいなもので、技や魔法のスキル、道具を自作出来る機能である。だが、この自作作業が時間のかかるもので大抵のプレイヤーがクイッククリエイトというモードで作成している。

クイッククリエイトとは既にサーバーに保管されてる細かい設定を引っ張り出し、ダメージや効果、名前等の設定をするだけのモードである。

反対に一からデータを作成する時はオリジナルクリエイトのモードで作成する。これは時間がかかる上にクリエイトした技や魔法のスキルの発動条件が厳しくなるのでほとんど使われない。私も大抵はクイッククリエイトを使用してるしな。

今ここで何かクリエイトする訳でもないし、出せるウィンドウを確認した私は装備を確認する為にアイテムリストとステータス以外のウィンドウを消す。

バージョンアップに伴うレベルやステータスの初期化があるが、装備品は引き継ぐはず。なのだが、今回よく分からない現象に遭っているので問題なく引き継がれているか不安になったからだ。

私の体が光に変わる際にデスクトップに表示されたあの文章。今更ながら気になるとは、私は実は危機感が薄いのか？ 起きてやることが容姿の心配とステータスの確認とは。

「現実からログアウトか……」

思わず言葉にしたが何故か自殺願望のある人が言いそうだな。いや、待てよ。

「私が気を失う寸前、私の体が光に変わっていた。つまり、私の体がああ文章通り消滅、または何処かに転送された可能性がある。さらに言えば続きの言葉の『クリエイトオンラインにログインします』とは、この体は、この体は……！」

一息に言葉を捲し立てる、が。気付いた結論に血の気が引いた。

「私の体は、今ゲームキャラクターになっている…？」

茫然とした様子で呟く。さらに悪い予想ばかりが頭の中で組み上がって行く。

よくよく冷静に考えれば、私が気を失う寸前に体が光に変わった事を思い出す。まさか、今、私は

「ゲームの世界にいるということになるのか…！？」

いや、待てよ落ち着け私。まだ決まった訳じゃない、決まった訳じゃないんだ。素数だ、素数を数えよう。

「いちにさんごなきゆう…って1は素数じゃないだろう！」

思わずの事態に動揺が隠せなくなっている私だがそれが収まる前に状況は急変するのは当たり前なのだろうか。

「ビークール、クールになるんだ私！…！？ 誰だ！」

私は感覚のスキルをカンストしたお陰か茂みが揺れ擦れる音を聞き逃さなかった。反射的に問いかけたが正直答えてくれる奴はいないと後々になって気付いた。この時相当動揺していたんだとシミジミ思う。

そんな状態な私だが回りを警戒するといくつかの気配がするのに気付く。どれだけ動揺してるのだ、私は。

気配に気付いた私は策敵のスキルを発動する。効果はマップに自分以外のキャラクターをアイコンで表示するものだが、マップを表示出来ない今は相手のいる方向を把握出来るものとなっているよう

だ。これも例の如くカンストしているので様々な効果が追加されており、数秒間相手の体格と距離、位置が分かるようになっていて。そして今ので気付いたことも発見したがそれは実戦で試す事にする。

ふむ、小型の四足歩行生物か。数は3か。

何故か戦闘になると前回のクリエイトオンラインをプレイする感覚になり、意識が落ち着きを取り戻すのを感じた。

私は瞬間装着のスキルを発動する。瞬間装着は名の通り一瞬であらかじめ指定した武具を指定した位置に装備するスキルだ。私はそれにより、背中にヒカルのキャラクター……私と同じ長さで幅の広い黒い大剣と腰に交差するように黒光りするショットガンとリボルバー、さらに侍のように下げた黒い刀を装備する。

ゲームの世界だから元から軽いのか、それともこの体のお陰か逆に安心する重さが私にかかる。

いつも場所の確認はマップに表示されたフィールド名を見ていたから気付くのが遅れたが、この森とこのエネミー。間違いなくあそこだ。

そうと分かればこのエネミーを打ち倒すだけだ。私は腰にある黒いショットガンとリボルバーを手に取り両手を上げる体勢で構える。

その行動がエネミーたちがどう捉えたかは分からないが、開戦意志と受け取ってくれたのか途端に茂みの揺れがこちらに向かっていくのが目視出来た。

「さて、開幕といこうか」

第二話

茂みから飛び出したのはベアウルフ。初心者殺しの代名詞で狼に熊の鋭い爪が生えたエネミーだ。理由は最初のダンジョンの敵はスライムやワームと言った素早さの低いエネミーばかりがいる中で、レベルが高く素早く、さらに攻撃力が高い。まだ操作慣れしていない初心者が出会つと反撃出来ずに気が付いたら町や教会に案内されるのが有名になり、気が付くと初心者殺しの代名詞となっていた訳だ。

私は飛び出したベアウルフに対し構えを解いて突貫する。ベアウルフとの距離は一気に縮まり肉薄するところまで接近するとベアウルフの鋭い爪が降り下ろされる。

私は左手に持つリボルバーの持ち手の底でパリングして横に流す。がら空きの顎に右手のショットガンの銃口を突き上げるようにねじ込み引き金を引いた。銃声とベアウルフの頭が飛び散る音を聞き、オーバーキルかと思いつながら体を回すように横へ動く。私の脇を飛び出した勢いのまま頭のないベアウルフが通過すると同時に策敵を発動する。

多分他の二体もベアウルフであることが予想できる。基本ベアウルフは群れたりせず単独で行動するエネミーなはずなのだが…。

オーバーキルとは相手のHPを大幅に上回るダメージで倒した時のシステムのようなものだ。クリエイトオンラインにおいてオーバーキルされたキャラクターは攻撃を受けた箇所が吹き飛んだり、切り飛ばされるエフェクトがある。その状態だとランクの高い蘇生方法以外では満足な蘇生が出来ずにいくつかのペナルティを受けて町

や教会で復活することになる。ペナルティの内容はランダムでレベルが下がっていたり、ステータスやベースが下がっていたりと色々ある。

策敵の効果で残り二体の位置を把握しつつ、ステータスを確認する。経験値を見るためだ。

どうやら今ので大分入ったらしく、6レベルになっていた。流石初心者殺しの代名詞だ。無駄にレベルが高い。この武器でなければ苦戦は必須だっただろう。まあ、まだ二体敵は残っているのだが。

だがその二体も先ほどのこともありこちらの出方を伺う体制に入ったようだ。……ならあちらが痺れを切らすのを待とう。

私はリロードのスキルを発動してショットガンの弾を補充する。このスキルは文字通り銃系統の武器の弾を所持品からモーション無しでリロードすることが出来る。ただし条件はあるが…。

たかが一発の為にスキルを使うなんてとは思うが、やはり警戒して損はないだろう。リロードの動作中に攻撃されたりすると厄介だ。MP消費も僅かだし問題はない。

などと考えているとあちらの様子が変わったな。我慢が出来ない連中だなと思ったのは束の間で、突然森の奥から放たれた光で視界が遮られる。

不味い、と思った私はもう一度策敵を発動して対峙しているエネミーの位置を確認する。

どうやら私の方には向かって来ないようだが、策敵の範囲に新し

い反応を感じる。二体はそちらに向かっているようだ。

中型の二足歩行生物が多数……人間か亜人間か……そうだな。もし仮に私が今みたく光を発生しながらここへ来たと言うなら現れるのは私と同じ……！！

私は策敵の効果を切らさないように連続で発動しながら補助魔法のヘイストを発動する。色々なRPGに登場する魔法の一つでオリジナルクリエイトで作成した魔法だ。効果は自身のベースの瞬発力を一定時間倍にするものだ。そうすれば移動速度などが上がるから前回もよく多用していた。

私は駆け出すとりボルバーを空に向け発砲する。二体の気を引こうと思ったのだ。が、

「ふむ、無視されたか」

あちらには私でなく突然現れた二足歩行生物の方が優先度が高いのか私が発砲したことを無視してまで向かっている。

少々むつとしたが、背後をつけるのは嬉しい限りだ。あちらには悪いが困になって貰おう。今の銃声で戦闘区域にいることはわかるだろう。

私は二体のエネミーを追うべく足を早める。

俺が目覚めるとそこは

「知らない天…じゃなくて森かよ……」

そう、森だった。

俺の名前は中川コウキ。創世高校の2年生だ。

学校に置いてあった機械をダイゴが触った途端頭に声が聞こえた
と思ったら気を失ったんだ。んで、起きたら森の中と。

「なにが起きたんだ……？」

とりあえず、身の回りの確認を…

ガン！！

と思ったら今度はなんだ！？

「銃声よ！」

後ろから聞き覚えのある声がした。振り向きながらそつちを見ると
幼馴染みの安藤ミカが見慣れない格好で立っていた。

「あれ、お前さっきまで制服着ていなかったっけ？」

「そんな呑気なこと言ってる場合！？ ほらダイゴ、起・き・な・さ・いゝ！」

「いで、いででで！ はっ、ここはどこ？ 私は俺！」

ミカの下で寝ていて耳を引っ張られて起こされたのは俺の親友の藤島ダイゴ。ダイゴも制服を着ていたはずなんだけど見慣れない格好をしていた。

……なんで？

「おおー、ミカにコウキじゃねーか。コスプレごっこか？」

「なに言ってるの。コスプレしてるのはあんたとコウキでしょうが」

ん、俺も？ …… 本当だ。俺の服も制服から見慣れない格好になっ
っていた。

「って、こんなことやってる場合じゃなかった！ コウキ、あんた
もあの銃声聞いたわよね！？」

「そうだった。なんだか危ない雰囲気だし、ここどこか分からない
し早く携帯で調べ」あー！！」「……どうしたダイゴ」

俺は言葉を遮るように叫んだダイゴにやれやれといった感じで聞
き返す。

ダイゴは俺より一つ上の高校三年生の先輩なんだけど、俺が高校

一年のときに入った部活でたまたま知り合ったのがきっかけで高校で世話になっている。見た目は茶髪黒目の中肉中背で背が俺と同じぐらいの……何故かイケメン。だけど女子の人気は低い。だってオタクなんだよな！

「むつ。コウキ、今失礼なことを考えたな？」

「そんな事無い。それでどうした？」

なんて勘のいい奴だ。とりあえず話題を変えて何があつたのかを再度聞く。少々怪しまれたがダイゴは指を俺に向ける。人に指を向けるな。

「いやな、コウキの格好がクリエイイトオンラインのゲームの初期装備の見た目だからつい叫んでしまった。よく見たらミカと俺もだかな。あつはつはつ」

と笑いながら答えてくれたがその言葉を聞いた俺とミカは同じ発想をしたのか驚きを隠せない様子で言葉を漏らす。

「はつはつはつ……って、あれ？　もしかしてこんなときまでゲーム知識全開な俺に感激中？」

「んな訳あるか！」

とミカはいい音の出た平手打ちをダイゴの頭に炸裂させる。

「いっつゝ。いいツッコミだ！」

痛がりながらもサムズアップでミカを誉めるダイゴ。

「そんな事言ってる場合か！ あんたが学校にあつた変な機械を起動させたせいで気付いたらこんな森にいて、服も制服じゃなくて変な服で、持ち物もなんも持っていない！ あんたのせいだかね！責任とりなさい！」

ダイゴの首もとを掴んで前後に揺らしながら口早にまくし立てるミカ。って、今気付いたけど携帯がない！

ミカにガクガク揺らされて顔色が悪いのに笑顔なダイゴはほっといて自分の格好を確認する。

親の遺伝で肩まである髪は金髪で背は高く185cmある。親が鍛えてくれたお陰か贅肉の少ない体だけど、目の色が緑で金髪の見ただ目のせいで教師に目をつけられるわ、不良に目をつけられるわ、皆怖がつて俺に近付くのはミカとかダイゴとかの変わり者だけになつてしまった。

ちなみにミカは昔からの付き合いのせいかそこらへんは気を使ってくれた。昔から何故か世話を焼いてくれるけど俺以外と話してるの見たことがない。早く友達とか彼氏を作つて幸せになつてほしいと思うけど。

ちらつとミカを見る。赤い髪の赤い目で整つた顔で頭一個ぐらい俺の身長よりも低い身長だけど同性じゃ高い方で、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。つまりモデル並にいい体型をした美少女な訳なんだけど、彼氏が出来ないのが不思議だ。

その時いきなり目の前に半透明の枠付きのガラスのようなものが出てきた。

「な、なんだこれ!？」

そりゃ驚くぞ。俺の声につられてじゃれていた二人がこちらを見る。

「それってクリエイトオンラインのウィンドウだ。うーん、こりゃ決定的か？」

「う、ウィンドウ？ 決定的ってもしかして……」

「あたしがクリエイトオンラインのゲームの世界にいるか、それかクリエイトオンラインの世界観に近い異世界にいたかってことよ」

ダイゴを揺さぶるのをやめ、額に手を当ててミカが説明する。

「そうさな。一番嬉しいのは夢を見てるってのかな」

「却下。三人同時について有り得ないでしょ」

「俺としたらゲームの世界にいるってことかな。ほら、映画とかで意識だけを電子世界にダイブするってやつあったろ」

「ところがどっこい。意識だけを電子世界に持っていく時のリスクって知っているか？」

「いや、知らないけど。なにが起こるんだ？」

「感覚がなくなるんだ」

第三話

クリエイイトオンライン 第5話

感覚がなくなる？

「痛い」

頬をつねったが痛みを感じた。これが痛覚がある証拠か。痛覚も感覚の一つだと思う。

「つまりここは異世界の可能性が高いってことか」

そんなことはないと思う、けど状況が状況だ。

「その通り。んで、そのウィンドウにはなんか表示はないのか？」

そういえば目の前にある半透明のウィンドウの事を忘れていた。

ダイゴに促されてそれを見る。

「なにになに。……………」『あなたたちはボタンを押せますか？』って書いてあるな」

「意味がわからんな」

「あたしも同意見だわ」

俺は手を顎に当て考える。

ボタンを押せますか……………ボタンを押す……………ボタン……………

ふとウィンドウの右上にあるバツのマークをしたボタンが目についた。

「これだ！」

このボタンを押せってことだろ！

俺がボタンを押すと同時に目の前のウィンドウが一回点滅して消える。

冷たい風が俺らの間を通りすぎる。

「コウキ。それはパソコンのウィンドウと同じでそのウィンドウを消すって役割なんだ」

「早く言ってくれ！」

「静かにして！ なにか音がする」

突然のミカの警告に身構える俺とダイゴ。耳を澄ませると草木の擦れあう音しか聞こえない。そういえばさっきの銃声があったことを思い出す、って何で今更思い出すんだよ、重要だろ俺！

しばらく辺りに目を配り、警戒すること1分ぐらいしたが何も来

る様子がなくミカに気のせいじゃないかと言おうと景色からミカに体を向ける。

「なあ、ミ『ガン！！』」

俺の台詞と被るように響く音。それはさっきの銃声と同じものだった。

「おっほー！　なんだなんだ、今の音！」

「静かにしてって言ったでしょ！」

何故か銃声に興奮したダイゴをミカが股間に蹴りを食らわしながら注意する。

「おおぅ……」と言いながら股間を押さえながら悶絶するダイゴ。自業自得って言ったら可哀想なので黙っとく。

ガンー！！

再びする銃声に大体音のした方向を注視する俺とミカ。

「……ここってゲームの世界が現実になった異世界なんだろう？」

声を潜めながらミカに聞く。目を音のした方向から離さないようにミカがそっねと小さく返事を返す。

「だったらこの森はそのゲームに出たダンジョンとかフィールドとか、モンスターの出るとこなんじゃないのか？」

ゲームの世界にはモンスターがいるもんだろうと思った俺はその事を口にとするとミカは顔をしかめた。

「…その可能性は高いわね。この世界に…じゃなくてこの森に銃を持っているモンスターとかいるの？」

「いや、いないな」

いつ悶絶から復帰したのか、ダイゴはミカが言った質問に答えながら続ける。

「この森はウルフの森と言って、クリエイトオンラインのチュートリアルとか初心者レベル上げ用のダンジョンだ。出てくるのはスライムとかワームとか足が遅いモンスターばかりだ。人型の銃を持っているモンスターなんていないはずだ」

その言葉を聞いてホツとする俺。ならこの銃声は敵じゃないのか。

「ホツとするのは早いわよ、コウキ」

「なんでだ？ 銃を使うモンスターなんていないんだろ。むしろこの世界の村人とか狩人さんかもしれない」

ミカが言った事に少しムツとしながら言葉を返す。するとダイゴが真面目な様子で話しかけてきた。

「コウキ、よく考えてみる。こっちに敵意はなくてもあつちは違つぞ。見慣れない連中が荷物も持たずに森でご対面なんかしたら間違いないく怪しまれるぞ。下手したら殺されるかもしれない」

その話を聞いて俺は血の気が引いた。それもそうだ、この世界はゲームの世界であって現実の世界でもある。この世界に住む人だっているし、この世界の法律だってあるかもしれない。この世界の人間が俺らを見てゲームの世界みたく親切に接してくれる保証はどこにもない。

「とりあえず言葉が通じるといいわね…」

「クリエイトオンラインは世界中でその国ごとにサーバーを管理してるから俺がプレイした時は日本語だったけど、この世界の言葉も日本語とは限らないな」

どんどん拳がる問題にこれからのことが不安になる俺。もし言葉が通じないと本当に頼りになるのは自分たち三人だけになる。

「！ 誰か近付いてくるわ…」

ミカが言った通りがさがさと茂みから音を立てて誰かが近付いてくるのが分かった。ダイゴも冷や汗をかきながらそちらを見ている。

ついに人影が見えた時、俺の心拍数が上がるのを感じた。そして現れたのは黒尽くしの長い黒髪の長身の男だった。

男はこちらを見ると少し驚いた様子の後に、顎に手を当てて考えるようなポーズをした。

そのまま一分か二分かお互いに動かず正確な時間は分からないけど、俺にはとても長い時間に感じるほど続いた。

「あの……」

沈黙に耐えきれずにミカが恐る恐るという様子で声をかけた。俺の緊張も高まる。

「ん、いやすまない。……少し考え事をしていた」

それに気付いたのか男はこちらに視線を戻す。

「君たちの名前は？」

いきなり名前を聞かれたが、言葉が伝わることに安心した俺は素直に自己紹介しようと口を開く。が、

「おい、にいちちゃん。そういうのは自分から名乗ってから言うもんだぜ」

ダイゴがそれを遮るようにいい放つ。にやりとカッコつけながら。

俺はダイゴの言い様に血の気が引いた。加えてダイゴをぶん殴りたい衝動に駆られたがミカがダイゴの股間に一撃を入れていたのを見て衝動はすぐに収まった。

「すみません！ こいつ少し頭がおかしいんです！」

ミカがすぐに頭を下げたので俺も頭を下げる。ここで武装した相手に挑発的な態度を取って死にたくはない。そしてダイゴは股間を押さえるようにうずくまり、頭がおかしいは酷い…、とか言っていたのは気にしない。

俺とミカが冷や汗を垂らしていると喉を鳴らす音が聞こえてきた。

なんだと、顔を上げると男は顔に片手を当てて笑いを堪えていた音だった。

「クツクツク…、いやすまない。確かに名前を聞く前に名乗るのが礼儀だな」

一息ついたのか男は顔に当てた手を下ろし、こっちを見据える。

「私の名前はヒカル、職業魔剣銃士だ。……これでいいか？」

まさか本当に名乗るとは思っていなくてポカーンと呆ける俺とミカ。いつの間にか復活したダイゴがサムズアップしながら自己紹介を始める。

「俺は大友ダイゴ。職業学生だ！」

それに続くようにミカも自己紹介をする。

「私は加藤ミカ。……職業学生よ」

若干後半が言うのをためらったのは多分言い方が恥ずかしかったからだと思う。

「俺は中川コウキ。職業学生」

俺は前に出ると、男…ヒカルに手を出した。

「ふむ、これはなんだ？」

とても不思議そうに言ってきたのにビックリしたが、こちらの世

界にはそういった風習はないのかもしれない。

「握手だよ。友好の意思表示みたいなものかな」

それを聞いたヒカルは納得した様子でふむと呟き、俺と同じように手を出す。

俺はその手を握るとヒカルが少し驚いた後に握り返してくれた。

第四話

「ふむ。なら君たちは私と違って気付いたらここにいたと」

あの後ヒカルさんに俺たちに起きたことを有りのまま話した。すると驚いたことにヒカルさんも状況は違うけど俺たちと同じようにこの世界についてさっき来たらしい。

「ダイゴくんは「ダイゴでいいぜ」…ダイゴは元いた世界でクリエイトオンラインをやっていたのか？」

聞かれたダイゴは少し興奮しながらも返事をする。

「そうだぜ。そういえば今日は新しいバージョンアップの日だったのにな、俺のワクワクを返せ！」

そんなことを最近ダイゴが話していたことを思い出す。何でも脳波で操作出来るようになったゲームだと聞いた気がする。

「……コウキはヒカルさんのことどう思う？」

ミカは警戒心があるらしく、あまりヒカルさんの事を信用出来ないらしい。ヒカルさんとダイゴが話し合う中俺にミカが聞いてきた。

確かに俺たちがこの世界に来て初めて会う人を信用出来るかと聞かれたら頷くのは難しいけど、ヒカルさんは信用出来ると思う。なので、

「俺は信用出来ると思うよ」

と答えた。

クリエイイトオンライン 第6話

ダイゴとヒカルさんが話し合った結果、近くにある町に行くことになった。俺たちが武器を持っていないのはゲームでは町で買い物をしてからダンジョンに行くもので、俺たちは初めから森にいたので武器なんか持っていないと言うことらしい。

ダイゴが俺のキャラクターのデータさえあればー！とか叫んでいたが、これは現実でゲームの世界なので無理なものだと早々に諦めをついていた。

ヒカルさんはこの世界の元になるクリエイイトオンラインのゲームをプレイ中にこの世界に来たらしい。どうしてゲームのデータを引き継いでこの世界に来れたのか分からなかったらしいけど、お陰で死なずにすんだと言っていた。

確かにこの世界はゲームの世界だけど、死んだら教会で蘇るなんてことはあり得ない。自分の身を守る術があるのはうらやましいと思い、武器を貸してもらえないかと頼んだけどはつきり断られた

ので不満はあつたけど諦めた。

その代わりと道中ウィンドウについて教えてもらった。

頭の中で出したいウィンドウを思うだけで出るらしいので試すと確かに出せた。なんで知っていたか聞くと前の世界で事前情報で把握していたとのことらしい。

それで面白がってステータスウィンドウをダイゴとミカと見せ合っていたらダイゴがヒカルさんのステータスを見て欲しいと頼んでいた。

少し悩んでから問題ないかと呟いてからステータスウィンドウを出してこちらに見してくれた。

「へー、バランスよくあげてんのな……。って、これでレベル9！？ しかもBP使っていない！？」

ダイゴがかなり驚いた様子でステータスウィンドウを見ていたけど俺とミカなんで驚いているか分からなかったが、それを口にするに興奮しながらダイゴが説明してくれた。

なんでもクリエイトオンラインはベースというステータスを決める数値が7つあって、職業毎にレベルアップ時のベースが増える値は決まっていて、ほとんど2つか3つのベースしか上がらないらしい。そしてBPっていうのは職業毎に増えるベースの値は決まっているのでこれを消費して、自分の上げたいベースに割り振る為のものだとか。これも職業毎に増える値は決まっていて、1か2しか増えないらしい。

ヒカルさんのステータスは9レベルなのに全体的に値が上昇しているとか。本人に聞いてみるとHPが極端に低い代わりにベースが優遇されてる職業らしい。それを聞いたダイゴはヒカルさんのHPを見て、俺には無理だと呟いてた。

しばらく歩いていると目の前にドロドロした緑色のスライムみたいなモンスターが現れた。

「ふむ、スライムか」

「スライムだな」

スライムらしい。ヒカルさんはおもむろに腰の刀を持つと近くにあった木の枝を切りつけた。するとあっという間に木刀が二本出来上がった。

あとで聞いた話だとこれはスキルの一種らしい。

それを俺とダイゴに手渡すとあのスライムを倒してくれとのことだ。

「ついにレベル上げが出来るのか！ やってやるぜ！」

と喜び勇んで突撃して攻撃を開始した。

「ふむ、コウキくんも攻撃をしないのか？」

「ええ、だってゲームだとどんな攻撃でもダメージが入りますけどこれはゲームの世界であってゲームでないから」

俺はダイゴの方を指差す。

「あんな感じに液体のスライムに木刀が効くとは思えない」

「あれ？ くっ！　なんで倒せないんだ！」

ダイゴが懸命に木刀を振り回してスライムを攻撃するけどピチャピチャ音がするだけで倒せる様子じゃない。

「つまり魔法とか物理的じゃない攻撃じゃないといけないんですね」

と今まで傍観していたミカが口を開いた。ヒカルさんは頷きながら答える。

「確かに有効だが、魔法を使用できない状況だと勝ち目がないことになる」

ヒカルさんはダイゴの方を見ると腕を組んだ。

「彼が気付けば勝てるのだが」

俺も続くようにダイゴを見ると

「やったぜ！　スライムごとき俺の敵じゃないぜ！」

と木刀を掲げて喜んではいでるダイゴの姿があった。どうやらスライムを倒したらしい。

「彼は気づいたらしい」

その後ヒカルさんにモンスターには弱点があつてそれをつけば魔法とかなくても倒せるだとか。スライムには液状の体を動かすための核があつて、それが弱点になっているのをダイゴは思い出して倒せたらしい。

ついでにミカが魔法について話したのがきつかけで魔法の素養があつた俺とミカが簡単な魔法を教わることになった。ダイゴが魔法の素養がないのでかなり悔しがっていたが、俺たちの職業が特殊なのだからしょうがないと思う。

クリエイトオンラインには色々な職業があるけど俺たちの職業は学生とステータスで表示されてた。ヒカルさんは何か考えてた様子だったけどダイゴが新ジョブキター！って叫んで喜んでたのを見てダイゴのセリフについて教えてくれた。今までのクリエイトオンラインにはない職業だったらしい。

ヒカルさんが取得出来るスキルを確認してみるといい、と言われてスキルを見ると三人ともバラバラだった。でもある程度は一緒のスキルもあつたけど同じ職業なのにスキルが統一されてないのはヒカルさんは興味深そうにしていた。

そしてスキルウィンドウとにらめっこしていたミカがあることに気づいた。ウィンドウが重なって表示していることを指摘しながらそれを掴んで見えるように横にずらす。

「首の動作、目の動作、口の動作、顎の動作、舌の動作、瞼の動作、総合：顔の動作………なにこれ」

ミカが気味悪がりながらスキルを読み上げてくれた。ヒカルさん曰く新スキルで今回のバージョンアップで様変わりした操作方法の

操作性を上げるスキルらしい。その中にあるスキルを俺は見つける。

「ミカ、魔法の素質つてのがあろぞ」

「本当だ」

「俺には無いぞ!？」

他にも体術の素養とかもあつたりなかつたりした。

この素養のスキルは他人のスキルを素養のスキルレベルまでSPを消費して覚えたり、他人の魔法とか技とかを教わつたりすることが出来るようになるものだった。

それで試しに取得してヒカルさんが使える魔法を見してもらつと目の前にレベルが足りません、と表示されたウィンドウが現れた。それを見たヒカルさんがレベルの低い魔法を使つてみるとヒカルさんが使つた魔法の名前と取得しますか?と表示されたウィンドウが現れた。

その文章の下に、はいといいえのボタンがあつたのではいを押すとまた目の前にウィンドウが現れる。クリエイトリストと欄に表示されたものでそのウィンドウのリストにさっきの魔法が追加された。

そついう訳で魔法の素養のあつた俺とミカがヒカルさんの使える魔法を教わつた。

ダイゴが魔法を教われないので自分で魔法を作ると言つてウィンドウを出してそれを触り始めたけどすぐに

「職業によるクリエイイト機能の制限！？　なぜだああ！」

と叫んでいた。

その後そういう系統の素養がないと魔法を覚えられない事がシヨックだったのか落ち込んでいたダイゴだったけど、ヒカルさんが代わりにとダイゴが技の素養というスキルを持っているのを知って木刀でも使える技を教えた。

こうして町に向かう道のりにいるモンスターに覚えた魔法や技を試しに使うて多少戦えるようになったのと経験値を獲得してレベルアップしたりしながら俺たちは始まりの町と言われるナミビア町に着いた

第一章 第二節 第一話 町にて

クリエイイトオンライン 第7話

「ふー、大分時間掛かった」

「コウキ、ネットゲーじゃああれぐらいが当たり前なんだぞ」

「どうだっていいわよ、早く泊まれるとこ探しましょ」

「ふむ、ゲームだと中央の広場に宿屋があつたはずだ」

日が少し暮れ始めたせいで辺りが薄暗いけど今俺たちがいる所から町は見えた。後ろにはさっきやつと抜けた森があつてそこから見渡す限りの草原のような丘の下に中世の外国みたいな町並みが見えた。

俺たちは丘を下りながらナミビア町のことを話す。

「ゲームだとどんな町なんだ？」

「確かスキルとかアイテムとかのチュートリアルクエストとかを依頼してくる可愛い女の人がいて……、名前忘れちゃったけどその女の人が出すクエストをクリアしていくだけの町だからどんな町かよくわかんねえや」

それを聞いたミカが

「使えない男ね」

なんて言うもんだから

「なっ！？ 使えないって酷くないか！？」

「使えないから使えないって言ったんだけ何か？」

「なんだと！？」

「なによ！？」

珍しくケンカしないと思ったらついが始まったか……。二人とも何故かそりが合わないときがあるみたいでしょっちゅうじゃないけどケンカしてる。

「あれはほっておいてもいいのか？」

「いいんですよ、その内落ち着きます」

若干取っ組み合いになっているがあれはあれで仲がいいのだろうと解釈してる。

「そういえばコウキさんとミカくんは私に敬語を使ってるが何故だ？ コウキくんは初めて会ったときは敬語は使っていなかっただろう」

「あー…、嫌でした？」

「ふむ、どちらかといえば心地好くはないのは確かだ」

意外だ。ヒカルさんは初めてこの世界で会った人だし色々とお世話になったからダイゴみたく礼儀はわきまえた方がいいと思ったんだけどな。

「私はこれでもゲーマーだからな。オンラインゲームをやっているとフランクに話してくれた方が違和感が無くてな。というか、むしろ敬語はやめてくれると助かる」

それを聞いた俺は頷いた。

「そうか。悪かったよ」

「うむ、そっちの方が私の好感度は上がるぞ」

「そりゃ嬉しいな。もっと上げなきゃな」

「クツクツク、ああ。どんどん上げてくれ」

ニヤニヤしながら言うてくるヒカルさんじゃなくてヒカルが少し子供っぽく見えた。敬語を使わないのがそんなに嬉しいのか今気づいたけどイケメンな顔がずっと綻んでる。

「さて、町の入り口が見えてきたがあの人二人はまだ終わらないのか？」

本当だ。いつの間にか入り口、町に入る為の門が見えてきた。つ

いでに二人の様子を見るとそろそろ決着がつくようだった。

「揺らめく焰、猛追。ファイヤーボール！」

「ホントに魔法を撃つ奴がいるかああ！」

ミカの目の前にサッカーボールぐらいの火の玉が産み出されて真っ直ぐにダイゴの足元に着弾する。

ドーン！！

轟音とともにこっちに吹き飛ばされたダイゴが飛んできた。

「ふむ、あれは火の玉を打ち出す魔法だな。詠唱しないといけないが使い勝手がよく、私もよく使う」

「そんなこと言うてる場合か！ 無事か、ダイゴ！？」

吹き飛ばされた勢いでズシャーと、音をたてて地面を滑りやつと止まったダイゴに近寄って安否を確かめる。

「へ…へへ…、やられちゃったぜ」

「見りゃ分かる！ といひかなんであの爆発で生きてるお前に驚きだ！」

「ふむ、私が説明しよう。ミカくんにはさっき教えたがクリエイトオンラインには魔法や技を使うとき殺傷非殺傷の選択が出来るのだよ。非殺傷でないとクリエイトした技で有効じゃないものとかあるからな。さらに非殺傷の魔法や技はクリエイタルが発生するように

なつて相手のHPを大幅に削れる」

「そーなのかー。じゃない！　って事は今は」

「うむ、クリティカルだな」

「へへ……HPが2しかねえぜ……」

HPが2しか残っていないとは……、それでも瀕死な筈なのに爽やかに笑いながらサムズアップしてきたダイゴにどうしたらそんな体を張ったことをできるか聞きたかった。

「ちつ、仕留め損なつたわね」

後ろを見ると忌々しそうにダイゴを見るミカが立っていた。

「ふむ、ミカくん」

「何ですか？」

ヒカルがミカとダイゴの間を遮るように向かいあった。流石に下手すれば死んでいたかもしれないからな。

「私に対して敬語は使わなくてもいい」

「そっちかよ！　むしろさっきの魔法を注意するもんだろ！」

予想外な言葉に思わず突っ込みを入れてしまった。

「ふむ、そつだな」

俺の突っ込みに視線をこちらに向けていたのをミカに戻すとヒカルは口を開く。

「火の玉を相手にぶつけずあえて足元を狙ったのは相手に避けずらくさせる戦略なのは分かったが、これをダメージ源として魔力を込めて使うのではなくそれを分けてもう一つ火の玉を作り出し、吹き飛ばされて受け身の取れない所を本命で撃ち落とした方が確実だ」

「誰が戦術指南をしろって言った！」

「なるほど、分かりました…じゃなくて分かったわ！」

「頼むからダイゴに撃つなよ！？」

「ええー、つまんなーい」

頬を膨らませて不機嫌な顔をするミカ。実行されると洒落にならないので説得した。だけど説得が終わるまで放置してたダイゴが

「あれ？ バアちゃん？ どうしたんだよ川の向こうで手なかんか振って」

「お前のバアちゃんは去年死んだろー！！」

三途の川を渡りかけていた。

「つたく、死にかけたぜ」

「死ねばいいのに」

あの後ヒカルが魔法を使ってダイゴを回復してくれたお陰で今やつと町に入ることが出来た。辺りはもう夕暮れで暗くなり始めている。

「ああ？ 何だと！」

「なに、爆発したいの？」

「ナマ言つてスンマセンしたー！」

あの一件でダイゴはミカに逆らえなくなったみたいだ。今はケン力が起きかけてもさつきみたく脅しに負けてしまっている。

「ふむ、宿屋に着いたが部屋数はどうする」

いつの間にか宿屋に着いたようだ。にしても元の世界でホテルとか旅館に泊まったことがなかったたので部屋数はまったく考えていなかった。それ以前のこと今気が付く。

「俺たち金あるの？」

それを聞いたダイゴとミカも今気が付いたらしく固まってしまった。ぎこちなく俺たち三人はヒカルを見る。

「ああ、安心しろ。さっき私の持っている通貨で会計してるのを見

かけた。私が引き継いだものの中に通貨も含まれていたようだ」

「そうかあ、はあ焦った」

無一文で野宿は避けたのでほっと胸を撫で下ろす。

「ふむ、見たところ一人一部屋とれるぐらい大きな宿屋だから四部屋取るのを提案するが」

「いいのか？ ミカは女の子だからともかく俺とダイゴは一緒の部屋でもいいよ」

ダイゴに目を配り同意を確かめると頷いてくれた。

「そうだが、野郎には野郎のわきまえってのがあるんだぜ？」

「ふむ、ならそう……することは出来そうにないな」

ヒカルがあるところを見るというのを止めてそこへ指を差す。

「ええー嘘でしょー……」

それを見たミカがげんなりした様子で頭を垂らした。ダイゴもそれを讀んだらしく気まずそうにしている。

「残り一部屋かよ……。てか日本語で書いてあるし」

石造りで二階建ての大きな宿屋の扉の脇に立ててある看板に空き部屋残り一部屋と書かれていた。ある意味読めた展開だけど実際にこうなるとかなり困るな。

「ふむ、少し主人に空き部屋がないか聞いてこよう」

言っやヒカルがさっさと宿屋に入って行ってしまった。

「どうするよ？」

「俺たちもついていこう」

「そうね。待ってるのはなんか悪いわ」

とりあえずついていく事が決まり俺たちも宿屋の中へ入っていった。

第二話

「ふむ、ではここは突然来た病人の受け入れで部屋が使われているのだな？」

「ええ、そうなんですよ。ギルドからもお金を貰っていますし部屋はあと一つしか空いてないですね。すみません」

「いや、なら一部屋を一週間ほど貸してもらいたい」

「一週間ですか……。ではお代はこちらに」

宿屋に入ってすぐ横にカウンターがあつてそこに後ろ姿のヒカルがいた。この女の受付の人と何か話をしていたようで、今会計を済まそうとしたようだった。

「いらっしやいませー。誠に申し訳ありませんがただ今を持ちまして空き部屋がなくなっていました」

受付の人がこちらが入って来たことに気付き部屋が無いことを告げた。

「ん？ ふむ、来たのか。外で待ってもらっても構わなかったのだが」

「ヒカルにばっか任せるわけにいかないからな。なにか出来ないかなと」

俺たちに気づいたヒカルが顔だけ振り向いて話しかけてきた。俺

が答えると受付の人が知り合いだと分かったのかヒカルに話しかける。

「お仲間様で？」

「ん？ ふむ、そうだな。彼ら合わせて四人で泊まろうとしたのだが、私達が全員で入っても問題はないか？」

ヒカルがまた対面するように受付の人に顔を向けると受付の人は少し困った様子で答える。

「実は空き部屋とはいってもベッドが一つ置いてあって、それが部屋の半分を占めてるほどの広さしかないですよ」

「って事はベッドが一畳の大きさだと……部屋の広さが二畳しかないのか？」

「それって男たちが足を伸ばせるぐらいもないんですか？」

部屋の広さを聞いたミカが自分は問題ないだろうが他の人が大丈夫かと受付の人に聞いた。

「そうですね……。そこのお二方は大丈夫かと思いますが、あなたは少し無理があると思います……。実はこの部屋は倉庫を改装して臨時で設けた部屋なんですよ」

二人というのは俺とダイゴの事だ。つまりヒカルぐらいの背丈だと狭い部屋らしい。それを聞いたヒカルはふむ、と呟いて受付の人に話しかけた。

「それでいい。私は廊下で寝るがそれでもいいか？」

これまたとんでもないことを言うもんだから受付の人も俺たちも驚いてしまった。

「お、お客様。当宿としまして問題ないのですが本当によろしいんですか？」

「うむ、問題ない。代金だ」

腰に下げていた袋に手を入れると銀貨を一枚取り出してカウンタ―に置く。それも驚いた受付の人は少し慌てた様子でじゃらじゃらとお釣りを出そうとしていた。

「なに、釣りはいらない。その分が廊下で寝る代金ということだ」

言うやカウンターに置いてあった鍵を掴むと受付の人の静止の声を無視して部屋に向かっていつてしまった。

また取り残された俺たちはどうしようどうしよとあわあわして受付の人に何か言われる前にヒカルの後を追った。

「なあ、別に俺ら二人が廊下で寝てもいいんだぜ？」

「そつだよ。俺もそれで構わないし」

「ふむ、さっきの受付の話だと私が寝るにはいささか狭いと言っていた。私は足を伸ばしたいしな。廊下で寝た方がまだいい」

「でもさ…」

「私が廊下で寝たいと言ってるんだ。これはただのわがままなのだからコウキたちが部屋で寝るといい」

という会話があつて俺たち三人は窓が一つついていて、その反対側にベッドが一つ置いてある部屋の中にいる。受付の人が言っていた通り俺とダイゴが床に座るだけで膝をぶつけ合ってしまうほど狭いものだった。この部屋に入るときに扉を開けると90度開いた時点で部屋の半分を占めてるベッドにぶつかっていたのを思い出す。

天井にあるランタンの光に照らされながら今は、ミカがベッドの上で体育座りをして思い耽つていて、ダイゴが窓に肘を乗せて星の見えるくらい空を見上げていて、俺はステータスウィンドウを出してそれを眺めていた。

「俺たち帰れるかな」

ぼつりと呟くようにダイゴが言う。

「ダイゴが弱気なんて珍しいわね」

それは俺も思った。いつものダイゴならこんな体験なんて前の世界ではゲームの中でしか味わえないのだから楽しんでいたとばかり思っていた。

「だってよ。いくら俺がやってたゲームの世界にトリップしたからって、ゲームみたく死んだら教会で生き返れる訳じゃないだろ。初めはマジでゲームの世界にこれたのかって舞い上がったけど、俺たちが倒したモンスターだって生きてたんだろ。今になってモンスターの命を無意味に消していたのになって、もし自分もあんなつまったら考えちゃまってよ」

吐き出すように言ったダイゴの台詞が俺の耳に入り込む。ミカもなにも言わずに膝を抱えて顔を伏せてしまった。

俺だって分かってた。だけどこれはどこかでゲームの世界なのだからと思い、ゲームをする感覚でモンスターを倒していたのも紛れもなく事実だった。

さつき町に向かっていたとき俺たちは、ヒカルがモンスターを倒してレベルを上げた話を聞いた。それでモンスターを倒せば経験値が手に入ってレベルが上がって、ステータスを上げたり新しい技とか魔法とか覚えてそれでモンスターを倒して、そしてレベルがまた上がって、本当にゲームをする感覚だったんだ。

ふと今出しているステータスウィンドウを見る。ステータスやベイスの数値の他に色々あるけど一つの数値の所に目が留まる。EXPと表示された文字の隣に数字が並んでいる。一匹当たりどれくらいの経験値が入っているか分からなかったけど、俺の覚えてる限り倒したモンスターの数は二桁はいていた。

そして自分のレベルが表示された所を見ると3と表示されていた。

「ダイゴ」

「なんだ？」

俺はステータスウィンドウを消してダイゴを見る。ダイゴはまだ空を眺めていた。

「俺は元の世界に戻りたい」

俺の言葉を聞いた二人がこっちを見る。

「言い訳かもしれない、わがままかもしれない。だけど俺はどんな犠牲があつたとしても元の世界に、家にかえるんだ……！」

いい思い出がある訳じゃない。むしろよくない思い出しかない気がする。だけど、

「妹の為か？」

「……そうだよ」

俺がいなくなって心配してくれるのは妹だけだと思う。俺の親は共働きで家にはほとんどいなかったからいつも妹と二人で過ごしていた。あいつはしっかりしているから俺がいなくても大丈夫なはずだ。だけど早く帰って安心させたい。

「そうかぁ……、ならさくツと帰れるように頑張るか！ まだ整理は

つかないけどやられる前にやれってか？ 少しぐらい殺伐としてもこの世界じゃ丁度いいだろ！」

俺の言葉をどう受け取ったのかわからないけど雰囲気がいつものダイゴに戻った気がする。ミカもダイゴを見て安心した様子だった。

モンスターも生き物だっていうのは分かる。何かを言い訳にする気はない。だからせめて生きて帰ろう。

その頃ある部屋の前に長髪の黒髪黒尽くし格好をした男、ヒカルが立っていた。その部屋の扉には関係者以外立ち入り禁止と書かれてた札がかけられていた。

扉を開けようとドアノブに手をかけたが鍵がかかっているようで開けられなかった。

「ふむ、ノック」

ノックというのはあるTRPGの魔法で鍵のかかった扉を開ける魔法だ。

ガチャンと音がした後そのままドアノブを捻ると扉が開く。ヒカルは体をそこにいれるようにして部屋に入り、後ろ手で扉と鍵をしめる。

ランタンで照らされた薄暗い部屋は窓を締め切られており、外の

様子が分からなくなっていた。ヒカルは部屋を見渡すために光を生み出す呪文を唱えた。

「ルーモス光よ……ふむ、やはり原作通りにこの世界は進んでいるのか」

ヒカルが生み出した光に照らされた部屋の床にはシーツが敷かれており、その上には死んでいるのか死んでいないのか分からない人たちが横たわっていた。それは老若男女、本当に様々な人たちがいて、全員コウキやミカと同じ格好をしていた。どうやらこの人たちを入れる為に家具等は移動したようだった。

「ふむ、アナライズ」

ヒカルは足元に一番近い男の子に手をかざして魔法を使う。するとヒカルの目の前にその男の子の姿が表示されたステータスウィンドウが現れる。

その中にある状態の欄に四肢麻痺、盲目、声帯不全、睡眠の表示があった。どうやら今は寝ているようだが体に障害があることが分かった。

ヒカルはそのウィンドウを消して次に近い人、またウィンドウを見て次に近い人と繰り返し返した。部屋にいた半数を見終わる頃力リと音が立っていることにヒカルが気付く。

そこに目をやるとこちらをギラついた目で見てくる一人の胸の貧相な短い青髪の美女が右手をシーツ越しに床を引っ掻いていた。

「ふむ、私の声は聞こえるか？」

そう聞くと女はトントンと床を叩いた。それを聞いたヒカルは他の人を踏まないように女に近づくと先ほどと同じくアナライズの魔法を使う。

するとヒカル目の前に女のステータスウィンドウが現れる。状態の欄には四肢麻痺（右手を除く）、声帯不全、盲目と表示されていた。

「目が見えないのにこちらを見るとは…、ふむ」

ウィンドウを消すとヒカルは女に囁くように問いかける。

「私の問いかけにハイなら一回、いいえなら二回床を叩け」

トンと音がした。

「ふむ、こんな状況から解放されたいか？」

トンと音がした。

「死にたくないか？」

トンと音がした。

「理不尽だと思わないか？ 何故自分がこんな目と思わないか？」

トンと音がした。

「他にも君と同じ目にあつた人たちが大勢いる。助けたくはないか」

?

トンと音がした。

「それなら私が君を助けよう。代わりに君には条件があるが構わないか？」

トンと音がした。

「なら私には返事はハイかイエスで答え服従しろ。それでもいいなら床を叩け……！」

[illegible]

その部屋には床を叩く音がしばらく止まなかった。

第一章 第三節 第一話 青神零

僕の名前は青神零。あおがみれい

僕には両親はいない。僕が中学生の時に交通事故で死んでしまった。まあ、意図的に起こされた交通事故だけど。

両親は色々と法律ギリギリ（むしろアウト）な商売をしていたから命を狙われる事も多かった。けど、あの手この手で潜り抜けてきた。だけど両親は僕を中学に迎えに行く道中でその意図的に起こされた交通事故で死んでしまった。

残されたのは中学までの両親との思い出と遺産の2つだけだった。子供の頃から人見知りで、友達らしい友達も作れなかった僕はこの悲しみを誰にも吐き出させず、胸の中に溜め込み、いつしか両親がいないの事が自分の生きる理由を見失わせていた。

そして僕は中学を卒業すると同時に高校には入らず両親を殺した相手を探して息の根を止める、つまり復讐のためにあらゆる手段を使った。

それが僕の生きる理由だと決めて。

そうして1年が経ちついに両親を殺した相手の情報を掴んだ。僕は狂喜した。ついに僕の復讐が果たせると。だけどその掴んだ情報は僕に空虚を与えるものだった。

両親を殺した相手は両親が遭った交通事故自体を起こした張本人で、両親を事故に巻き込み、自身もその事故で死んでいる。死体は黒炭状態で本人の判別は難しかったがDNA鑑定で本人と解つたらしい。

つまり復讐をするための相手が初めからいなかったのに僕は1年間を無意味に自暴自棄になりながらいない相手を追い続けていたことになる。復讐を生きる理由としていた僕はその復讐自体が無意味だとこの結果に突きつけられている気がして茫然自失となった。

それから僕は両親と住んでいた家に帰り引きこもった。その時両親が残してくれた遺産のおかげで何不自由なく自堕落な生活をしてインターネットにはまりこみ、ネットゲームにはまりこみ、自分は腐ってしまったと感じながら1年がまた過ぎた。

そしてある時僕のはまっていたネットゲーム、オンラインゲームというのかな。クリエイトオンラインというゲームをしているときあるプレイヤーに出会った。名前はヒカル。僕の生きる理由を気付かせてくれた人だ。

その時の僕はオンラインゲームをしているにも関わらず、パーティープレイをせずにひたすらソロプレイばかりしていた。自分がそ

うしていたのは人見知りなのとその時は他人との関わりを持ちたくないという気持ちがあわさった結果だと思う。

そうしてクリエイトオンラインがボイスチャットに対応して、3Dになったばかりの頃だった。

来る日も来る日も僕はダンジョンにこもってひたすらモンスターを狩っていた。レベルを上げるために経験値を稼ぐためだ。そうして半日以上使って3レベルは上がるほどの経験値を稼いだ僕は町に帰ろうとした時だ。

転送石というアイテムがあつて、一つしか持てないがそれを使うと町にワープする効果があるものを僕は使った。が、画面が暗転して表示されたのは町の風景ではなく邪悪な雰囲気の漂いモンスターが闊歩するダンジョンだった。

この時はゲームをするとき声を出さないようにしていた僕も呆けたように、え……って呟いてしまった。そうしてある日にクリエイトオンラインの掲示板を見ていた時に妙な噂を書き込んでいた記事の内容を思い出した。

転送石を使うと超低確率で最高難易度のダンジョンの何処かに飛ばされるバクがある、という内容だ。

その事をすぐに思い出した僕はコントローラーが手から滑り落ちるのを察知して慌てながら握り直した。その時の僕は慌てに慌てた。なんせ噂によるとこのダンジョンは徘徊するモンスターの強さが異常に強く、自分でいうのもなんだけど廃人ゲームの僕でさえもこずって倒せる先程までいたダンジョンのボス並かそれ以上に強いという設定になっているらしい。

つまるところそんなモンスター一匹に勝てるかどうか分からないのに三匹、四匹と寄って集られたら集団リンチという結果になるだけだった。もしそうなればせっかく稼いだ金、さらには持ち物全てが無くなってしまう。僕のキャラクターのように高レベルのキャラクターがそうなるのと立て直すには相当の時間が必要となってくる。

だけど僕が使っていたキャラクターには幸いにもステルスというスキルがあってモンスターに気付かれずに移動出来る効果がある。僕はそれを使ってこのダンジョンから脱出を試みた。が、それが無駄な事だとすぐに思い知らされた。

さっき言ったようにこのダンジョンのモンスターはさっき僕がいたダンジョンのボス並かそれ以上に強い。さっきのボスにはステルス察知やステータス異常無効等様々な能力を持っていた。つまりこのモンスターには当たり前の様にその能力が付加されていて、僕のステルスなんて無いに等しくすぐにモンスター見付かってしまった。

こちらに気付いたモンスター達が僕のキャラクターを囲うように分散した。ステルス状態だと素早く動けないというリスクがあったのであつという間に囲まれてしまった。

絶体絶命、四面楚歌、無理無駄無謀と頭の中でそれらの文字が流れていた。とその時銃声がしたと思うと次々にモンスター達が倒れていった。そうしてモンスター達が成す術無く全員倒されると一人の黒づくめのキャラクターがこちらに近付いてきた。

そして今でも覚えている。そのキャラクターから投げ掛けられた言葉は

「迷子か？」

だった。

この後助けられたと気付いた僕は一通りの自己紹介と感謝を述べると迷子ではなく例の転送石のバクでここに転送された事を説明した。

興味深そうにふむ、と呟いた後に僕の言葉に応じて相手も自己紹介してくれた。これが僕とヒカルとの最初で最後になる出会いだった。

とりあえずと出口に案内すると言って歩き始めるヒカル。僕もそれを追うようにして歩く。そして道中お互いに無言で歩を進める。

しばらく経つとあまりに無言の空気に耐えられなくなった僕は何故か自分の身の上話を語り始めた。何故こんな話を始めたのかは未だに自分でも分からなかった。先程の窮地から救ってくれたからかもしれない。ヒカルはこちらを向かずに無言で僕の話聞きながら歩いていた。

その時僕はヒカルのその態度に多少イラつきいていた。ある意味の暴露話をしているのに相槌も打ってくれないのかと。そんな態度のヒカルに初対面にも関わらず当てつけるように、ぶつけるように僕はこの2年間の感情を全て吐き出していた。

両親が死んでしまった時の悲しみと絶望。

復讐を誓った憎しみそして怒り。

それが出来なくなつた空虚、自失感。

何をすればいいのか分からない迷走する気持ち。

それらを吐き出すと気付くとヒカルが立ち止まりこちらを見ていた。どうやら出口に着いたみたいでヒカルの背後に外の風景が広がっていた。

「ふむ、なら君は救いようのない馬鹿だな」

僕は同情の言葉を待っていたらしく返ってきたのが侮辱の言葉だった。そしてその言葉が脳に伝わるには少々時間が掛かった。

馬鹿…馬鹿…馬鹿…？

その言葉が脳に染み渡り僕は気付くとヒカルに向け攻撃を繰り返していた。

「お前に…お前に僕の何が分かる!？」

「ふむ、繰り返して言うが救いようのない馬鹿…おおっと」

さらに攻撃を仕掛けるがヒカルは僕の攻撃を易々と避けつつけながら話しかけてくる。

「気付かないのか？ それとも気付かないようにしていたのか？ 君に足りていなかったものを」

その言葉にドキリとした。それに気付かれないように攻撃の手数

を増やす。

「ふむ、あえて言おう。君には自信が、覚悟が足りない」

僕は自分を見透かすように言ってきたヒカルの言葉に逆上した。

「分かった…分かったような口をきくなああ!!」

そうして放った一撃もひらりとかわされ苛立ちが募る。正直そんなことは誰よりも自分が分かっていた。

僕の人見知りな性格は他人と話す時に相手にどう思われているか、嫌われているのか、馬鹿にされていないか、それらが心配でしうがなくしていた。

「ふむ、そんな様子では夢の一つも持ってなそうだな」

「!？」

ヒカルから言われた言葉が過去の両親との思い出がよみがえらせる。

『零。お前の夢ってなんだ？』

『父さん、夢ってなあに？』

『零が大きくなった時に叶えたいものだ』

『んーと、父さんと母さんとずっと一緒にいることー!』

『はははっ、嬉しいけどそれは難しいぞ?』

『なんで? いなくなっちゃうの? どっかいったっちゃうの?』

『いや、いなくなんないさ。ただな、もしずっと一緒に父さんと母さんといいたいなら零が偉くなんないと』

『偉いつてどういうこと?』

『人を動かす覚悟があるって事だ』

『? よく分かんないや』

『子供には早いかな? ……そうだな、零』

『なに? 父さん』

『社長になれ!』

『社長つてなに?』

『会社の中で一番偉い人の事だ』

『社長になれたらずっと父さんと母さんと一緒にいられる?』

『ああ、飛び切り大きい会社の社長になれたらずっと一緒にいられるぞ』

『じゃあ、僕の夢は社長になること!』

『そうかそうか。それじゃあ父さんと約束してくれ』

『なあに?..』

『父さんと母さんがもしもいなくなってもその夢を忘れるな』

『え...父さんたちいなくなっちゃうの?』

『いや、もしもだ。もしもいなくなっても必ずその夢を叶えてくれ』

『どうしてー?..』

『それは零が夢を叶えた時に分かるよ。それまでの楽しみだ!..』

『違う...』

気付くとヒカルへの攻撃をやめていて、涙が溢れだしてコントローラーに落ちていた。

「ふむ、何が違う?..」

「そうだ...僕にはまだ理由があるじゃないか...」

「?..」

「撤回しろ...!..」

「...何?..」

「さっきの言葉を撤回しろ!..」

「君には夢がある?」

「ああそうだ。僕には夢がある。社長になる夢が!」

「ふむ、社長か」

忘れていた。ヒカルに言われなかったらずっと忘れていただろう。
父さんとの約束を。

「約束したんだ! だから僕は社長になる!」

「君には無理だと思うがね」

「なんだと!」

「社長は会社の中で一番上に立つ人物の事を言う。言わば一番偉い。
確かに社長になれば人を動かす権利もある、だが。君にはその覚悟
があるのか?」

「はっ?」

「人を動かすということはその人を信じ、もしその人が失敗したと
きの責任を持つ覚悟があるということだ。自信も覚悟もない君が社
長という膨大な人数の責任を背負えるのか?」

「それは…」

思わず言い淀む。

「ふむ、所詮口からデマかせか」

その言葉を聞き先程思い出で父さんが言った台詞がよみがえる。

『それじゃあ父さんと約束してくれ』

『父さんと母さんがもしもいなくなってもその夢を忘れるな』

『もしもいなくなっても必ずその夢を叶えてくれ』

『それは零が夢を叶えた時に分かるよ。それまでの楽しみだ!』

「……………じゃない」

「ん?」

「デマかせなんかじゃない!」

「つまり、数百数千の上に立ちその全員を信じ、全ての責任を背負えると」

確認するように、間違いのないように聞くヒカル。

『迷子か?』

初めてヒカルに出会った時の台詞が頭に流れる。それに対しても僕は流した涙を拭き取り言い放つ。もう迷子じゃないと。

「ああ、…僕はもう迷わない。今、僕の生きる理由を見付けたんだ

「！」

『偉いつてなに？』

『人を動かす覚悟があるって事だ』

『？ よく分かんないや』

『はははっ、子供には早いかな？』

父さん、今なら分かるよ。だから、僕はここに宣言しよう。

「…自己紹介がまだだったね」

「ふむ、さっきしたと思うが」

「いや、まだしてないね。『レイ』と『ヒカル』はしたけど『僕』と『君』とはまだしていない」

「……………クククッ！ そうだな、まだだったな」

「僕の名前は青神零。いずれ全ての企業の頂点に立つ男だ！」

「ふむ、企業の頂点とは大きく出たな」

「それが僕の、僕と父さんとの約束であり、夢だ！」

「ふむ、前言撤回しよう。君…じゃない。青神零は救いようのない馬鹿ではなく救いようのある馬鹿だと」

「それは誉め言葉かい？」

「うむ、誉め言葉だ」

「ハハハ、それはありがとう」

「クククッ、ありがたいだろう」

その言葉を皮切りに二人の間に笑い声が響く。

「ふむ、青神零。そんな夢を持っている君に手助けと言っては何だ
がこのサイトを覗くと良い」

そういつてログにURLが表示される。

「うん、すぐにも見るよ」

「多分君の力になるはずだ」

「そうか、ありがとう」

「なに、気にすることはない。さっきの態度に対する謝礼みたいな
ものだ」

そうかと言いかけた時、ログに緊急メンテナンスの告知が表示さ
れる。あとメンテナンスでサーバーが落ちるまで30秒もないとの
事だ。

「ヒカル！ 君の名前を僕は聞いていない！」

「ふむ、そういえばそうだったな」

ログに刻一刻とカウントダウンが流れる。

「私の名前はザザザ。いずれザザザザザえるぜだ」

ヒカルの声が砂嵐に混じってほとんど聞き取れないまま画面が暗転、サイトのトップページが表示される。

あの後ヒカルを探そうと必死になってクリエイイトオンラインの中を探した。あの時にフレンド登録という機能を使わなかったせいで相手の居場所が分からずじまいで結局ヒカルと会うことはなかった。

そうして僕は20歳になった今、青神グループの社長の座に君臨している。

青神グループは僕が両親の遺産で立ち上げた会社で、様々な分野に深く浸透し、今では全ての企業の頂点に立っている。

創立4年でここまでの成長を見せたのは何も僕だけの力じゃない。優秀な人材に両親の遺産、ヒカルに教えてもらったサイトにあったもの。全てが噛み合うように、元ある姿に戻るように今の僕と会社になってこの結果を生んだ。

前と違ってくる日もくる日も仕事の書類に追われる日々。だけど僕だって人間だ。仕事の合間に休憩がてらゲームをする。

やるのはもちろんクリエイイトオンライン。前のデータはアカウントハックされてバーンしていたので新しくキャラクターを作ることになる。

だ^だけどそれでもいい。ク^クリエイトオ^オンラ^ラインを^をプ^プレイすると、ヒ^ヒカルとの接^接点を^を繋^ついで^いら^られる^のだから。

人物紹介等（前書き）

分かりにくかったりした所などの補足をここに書くかなと思ひ
まして制作。

質問等ありましたらここに反映して頂くかなと思ひてます。

人物紹介等

クリエイトオンライン

幾度とバージョンアップやらアップデートやらを繰り返した結構長寿な人気オンラインゲーム。バージョンアップの度にゲームをプレイするためのコントローラーが変わるので社会人向けとも言われている。

ヒカル（本名不明）

身長136cmの無い乳がコンプレックスの美少女。年齢は15歳で生まれてこのかた髪の毛を切った事がなくその黒髪は床まで届いており、いつも引きずる形で移動している。無類の甘党、今作の主人公。なおゲーム内また、クリエイトオンラインの世界にいるときは長い黒髪の長身の細長スリムな男になっている。

職業は魔剣銃士で様々なボーナスの代わりに常時最大HPが10%の状態になっている。所謂ハイリスクハイリターンの職業。装備や見た目は黒い色の装備を集めることに執着した結果、見た目が黒尽くしになってしまった。武器は装備していると移動速度が落ちるので戦闘以外では装備していない。

ちなみに武器を装備するときは瞬間装着というスキルを使って装備している。その武器は黒い大剣に黒い刀、黒いリボルバーに黒いショットガンと武器も黒尽くしに。

コウキ（中川コウキ）

現役の高校二年生。年齢は17歳でクリエイトオンラインなどのゲームには興味がなく、ちよつと不良な生活を送っていた少年。髪は肩まで伸ばしている金髪の目の色は緑、外国人の母親の遺伝でこんな色になってしまい、目立つ特徴のせいか不良やらによく絡まれていた。母親は背は低いのだが父親が200cmを越える長身のせいか自身も185cmとやはり背が高い。ちなみにイケメン、今作のもう一人の主人公。

ゲーム内の職業は学生。まだ未知の職業で現地点で分かっているのはクリエイトリストでの技や魔法の作成に制限がある代わりに他人の技や魔法を教わることの出来るスキルを持っている。

装備や格好は。Qの布の服みたいなのをイメージして、上着とズボン、麻の靴を身に付けている。武器はヒカルから受け取った木刀のみで、普段はベルト代わりの腰に巻いてある紐にくくって侍よろしくみたく下げている。

ダイゴ（大友ダイゴ）

高校三年生のコウキの先輩にあたる。年齢は18歳で誰彼構わず話しかける性格、友達が多いが彼女は出来たことがない。理由が自信がオタクだということが多少なのと、普段から奇行に走ることが多いのが一番な理由だ。茶髪黒目のイケメン。身長はコウキと同じかそれ以上ぐらいで中肉中背で太ってはいない。本編では記載して

いないが髪型は短く刈り上げたスポーツ刈り。

ゲーム内の職業は学生で説明はコウキと同じだが、ダイゴは魔法を使えるためのスキルが無いため魔法が使えない。せっかく異世界に来たのに魔法が使えないとダイゴは気にしているようだ。

格好や装備はコウキと同じだが、武器はヒカルから受け取った木刀のみで、実はミカとの喧嘩の際ミカの放った魔法で木刀が燃えていたため今は手ぶらだ。

ミカ（加藤ミカ）

高校二年生でコウキとは幼なじみの関係。年齢は16歳で強気な性格のせいか他人との衝突が多いのが悪い癖だ。何故か疑り深いところもありそれが露骨にすることもしばしば。身長は同性の中でも高い方で170cm前後ありボンキュッポンを表したようなモデルのような体型だ。髪型は赤いポニーテールで背中の中ほどまである。目は赤く、美少女で色は親の遺伝ということになっている。

ゲーム内の職業は学生で以下同文。

格好や装備はコウキやダイゴと同じだが、武器は持っておらず主に魔法を使って行こうと考えている。

レイ（青神零）

中卒後、亡き両親の残した遺産を使い青神グループを設立。様々な苦難を越え会社をトップ企業までに発展させた天才、または努力家。年齢は20歳で独身。青い髪に中性的な顔つきをしている。中卒後から運動をしていないせいか体つきは細く、身長173cmの体重54kgと日々の苦勞で痩せ細っている。髪型は短髪で目は青い。ちなみに男。見た目が限りなく女、しかも美がつくほどなので勘違いでナンパされることがある。

職業は調教師。新しい職業でステータスが常に25%になる代わりに特殊なスキルが使用できる。

格好や装備はコウキたちと同じ。

殺傷と非殺傷

クリエイトオンラインでは敵に対する攻撃を殺傷と非殺傷のどちらかを選択して攻撃することが出来る。

殺傷で攻撃をした場合は実際の戦闘のように外傷がついたりHPが残っていたとしても急所をついたりすると即死するといったもの。例えば銃などでヘッドショットをするなど。

非殺傷はゲームのように相手を攻撃してもHPが減るだけで外傷などはつかない。急所やクリティカル率によって攻撃した際にクリティカルが発生するようになり、HPが0になると戦闘不能になる。かわりに格ゲーのようなコンボや技が実行出来るようになるのでこちらの方が人気がある。

HPとMPの概念

HPは主に自分の体力の残量を示していて、これが0にされた時の相手による攻撃の殺傷、非殺傷によって変化する。殺傷の場合は死亡扱いになり、非殺傷の場合は戦闘不能状態になる。

MPは主に自分の魔力または精神力の残量を示していて、これが0になると気絶状態になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1115p/>

クリエイトオンライン

2011年1月13日18時00分発行